

自作の花器に花を生ける (つくる視点から使う視点へ)

美術教育講座・原田義明

1. 授業の概要と目的

本授業は、学校教育実践コース(美術教育専修)及び造形芸術コースの2回生を対象とした授業であり、後学期に開講されている。本年度の受講生数は17名(美術教育専修2回生1名、3回生1名、4回生1名、造形芸術コース2回生11名、3回生1名、4回生2名)である。このうち、継続して受講したものは、14名であった。

本授業では、やきものの2大成形法の1つである「手びねり成形法」の基本的な技法の習得を目的とし、器制作を通して、用と美、機能と造形を理解し、先史時代の昔から人間の生活に密接に結びついているやきものについて考察する。

到達目標は、以下の3つを設定している。

- (1) やきものを構成する二大要素である土と釉薬の基礎的な事柄について理解し、手びねり成形の技法について説明できる。
- (2) 与えられた課題内容を理解し、作品制作に生かすことができる。
- (3) 土と釉薬及び手びねり成形の特性を的確に捉え、各自の制作意図に従って、作品化できる。

2. 授業内容

授業では、ほとんどの受講生が陶芸未経験であることを念頭に置き、土づくり(荒練り・菊練り)から始めて、課題を設定し、デザインスケッチ⇒粘土成形⇒乾燥⇒素焼き⇒施釉⇒本焼きの一連の作業工程を各個人の制作進度に対応して、全体指導と個人指導をその時の状況に応じて進めていった。

3. つくる視点から使う視点へ

本授業では、「器」を全体的なキーワードに2課題を設定し、工芸における「ものづくり」、つくること＝使うことを学生自らに体感してもらうことを目的に、課題Ⅰでは、花器をテーマに作品制作を行い、花器完成後、いけばな実習を実施した。課題Ⅱは、課題Ⅰで学んだ様々な事柄(つ

くる視点から使う視点、制作工程、技法、表現)等を生かした「器」をテーマにした自由制作とし、素材や技法に対するより深い理解と造形的な表現力の向上を目指した。

4. 授業公開

平成21年12月2日(水)に授業公開を行った。本時は、課題Ⅰの最終回に当たり、1時限目にいけばな実習を実施し、2時限目の合評会を公開授業とした。当日の授業の流れを以下に記す。

1時限目：いけばな実習(8:30～10:00)

テーマ：「自作の花器に花を生ける」

講師：原田松海氏(龍生派いけばな講師)

実施場所：彫刻実習室

参加学生：14名

授業開始前に学生は、窯芸室に焼き上がった花器を取りに行き、その後彫刻実習室に集合し、いけばな実習を開始する。まず、今回のいけばな実習を担当する講師を紹介した後、講師より、いけばなの成り立ち、そして花を生ける上での留意点(真・副・体について、アンバランスな形(不等辺三角形)が美しい、空間を活かす、あしらいについて等)の説明があった。その後、用意された華材(数種類の華材をまとめたものを人数分用意した)の中から各自が自作の花器に合うものを任意に選び、生け込みの作業に入る。いけばなは、華材(草木と花)に内在している美しさや個性を選び分け、引き出すことが重要である。また、花器は、いけばな全体のイメージをつくる役割を果たすものであるが、ほとんどの学生がいけばな初体験であったが、全員真剣に取り組んでいる姿が印象的であった。中には、自分の選んだ華材が花器に合わず、華材の一部をお互いに交換する学生もいた。実習中は講師と授業者で、前述の留意点を中心に個人指導と全体指導を行った。生け込み終了後、いくつかの作品を取り上げ講評後、全体の総評が行われた。その後、片づけと2時限目の合評会の準備を行う。

2時限目：合評会（10：30～12：00）

①鑑賞会（10分）

机間を自由に移動し、花を生けた花器を鑑賞する。この時、他者の作品で良いと思う作品を2点選ぶように指示する。これは、1）自己作品と他者の作品を比較する中で見えてくるものを感じ、考えて欲しい。2）他者の作品の良さを自作品との関係の中から見出す。ことを意図したものである。

②作品発表（80分）

出席番号順に1人約5分の持ち時間で作品発表を行う。発表内容は、○他者の作品で良いと思う作品を2点発表（どのような点が良かったかを具体的に述べる）○今回の作品制作と活動（いけばな実習）を振り返り、感じたことや反省点を発表する。○次作品に向けての課題や抱負を述べる。（自らの問題点や課題を見出し、今後の制作に生かす）といったことを中心に発表を行った。

発表からは、自己の作品を実際に使うことを通して、用と美、機能と造形を体感し、様々な問題点や課題を発見した学生が多く見られ、発表後の意見交換も活発に行われた。授業者も各発表後に発表内容を考慮しながらコメントを加えた。最後に来週から「器」をテーマにした新しい課題に入ることを告げ、今回のいけばな実習の活動を通して学んだことや検討課題を整理して、次作品に生かして欲しいことを伝えた。なお、華材は各自持ち帰り、自宅（自室）にある花器や様々な容器に生け直して華材を無駄にしないように指示し、片づけの後、本授業を終えた。

5. 授業公開のカンファレンス

今回の授業公開は、授業担当者以外に1名の教員の参加があった。授業に関するカンファレンスは2時限目の授業終了後、3時限目に行った。その際、参加教員からは授業に対する貴重な意見やコメントを頂いた。以下、主なものを列挙しておく。

○個々の学生へのアドバイスが的確でわかりやすかった。

○「使う視点」ということからすると、今回の花器という課題は、使い方が限定される。課題Ⅱへの「器」という共通テーマでのつながりはどうか。

○学生に2点選ばせて、どのような点が良いかを述べさせていたが、選ぶ視点をもう少し具体的にしたい。

○学生からの発言が出やすいように工夫していた。

○釉薬や土などの素材に対する指摘が的確であ

った。

その他、素材や技法、いけばなに関する質問がいくつかあった。

本授業を終えて、授業者としての課題や反省点を以下に挙げておく。

①今回は華材の量が多かったため、小品の花器を制作した学生は、一部の華材しか使用できなかった。事前に華材の量や大きさを具体的に学生へ伝えるべきであった。

②いけばな実習の活動時間（生け込み）が短かった。例年、実習では2コマの授業を連動させて、生け込みの作業に90分程度使っていたが、今回は約60分で生け込みを行った。その分、合評会は充実したものとなったが、活動時間が不十分であった。

③生活空間を考慮した作品制作。用を意識したものであれば、当然つくられたものがどのような生活の場で使用されるかを制作者は考慮すべきである。このことについて、制作中に事例などを示しながら学生にもっと強く意識させるべきであった。

6. まとめ

今回のいけばな実習は、学生に制作者としての「つくる視点」だけでなく、「使う視点」を強く持って欲しいと考えて、4年前から実施しているものである。工芸分野では、素材・技法・表現の3つの要素が重層的・複合的に複雑に混じり合っただけで作品が成立する。制作者はややもすると「つくる視点」のみで、「使う視点」が曖昧になりがちである。特に工芸分野の専門科目を履修して日の浅い1～2回生には、その傾向が多く見受けられる。そのような点を少しでも解消できればとの思いで、このいけばな実習を継続して実施している。今後も授業者として、学生が「つくる視点」と「使う視点」、2つの視点をバランスよく保ち、様々な思いを込めて作り出されたものを生活のなかで使うという意識を個々の学生が強く持ち、制作に取り組めるような授業を目指したい。

最後に今回の授業公開で参加教員から頂いた意見やコメントは、いずれも授業者にとっては、今後の授業を展開していく上で大変参考になるものであった。特に課題Ⅰのいけばな実習の体験をいかに有意に課題Ⅱの制作につなげていくか、指導法や指導内容を再検討したい。